

2008/9/12(金) 午後 4:30

無題

練習用



0





写真: フランクルの生家、プラター公園

【フランクルの生家】

ホテルから地下鉄を乗り継いでネストロイプラッツ (Nestroyplatz) 駅で下車して、地上に上がり、大きな道路を渡ると、そこがチェルニンガッセ (Czerningasse) 入り口でした。プラータ公園のある方角へ歩いてまもなくの右側の大きなアパート、そこがフランクルの生家でした。玄関の銘板には「神経科・精神科医フランクルの生家 強制収容所に行くまでこの家で暮らし、仕事をした」と書かれています。その足元の道路には「ユダヤ人の医師たちアウシュビッツへ」と刻まれた銘板が、戻れなかった医師たちの名前と共に埋め込まれており、不幸な歴史は真実として、今も消えることはないことを物語っています。

チェルニンガッセの通りをはさんで、フランクルの生家のまん前にはアルフレッド・アドラーが住んでいた家もありました。

フランクルの生家をしみじみ見渡していると、想像はフランクルの幼少時代にタイムスリップし、プラータ公園へ走り出すピクトール少年を呼ぶお母さんの声が聞こえそうな気がします。

【プラータ公園】

チェルニンガッセを下ってまもなく大きな観覧車が見えてきました。あの有名な映画“第三の男”の舞台となったプラータ公園の入り口近くにある観覧車です。十数分かけて30台のゴンドラ(一台20人乗りのかなり大きなもの)がぐるりと一回りします。最高で地上64メートルの高さになるとか。観覧車には全員が乗ったのですが、この日もお天気が良くウィーンの街や遠くの森、丘を一望することができました。

観覧車の後は、三々五々、それぞれに遊園地内をめぐったり、リリプットバーンと呼ばれる小さな列車に乗って公園内をめぐったり、アイスを食べたり。私たちはプラタナスの並木道を歩き、園内に茂る木々の間を散策しながら、近くで遊ぶ子どもたちの姿を見ては、フランクルの子ども時代を想像し、当時のウィーンの人々の暮らしに思いを馳せておりました。

【フロイト博物館】

プラータから、さらに地下鉄と市電を乗り継いで、ショットtentオーア (Schottentor) という駅で降りました。ここはウィーン大学のキャンパス前になります。ここから二班に別れ、興味のある人たちはフロイト博物館まで足を延ばしました。途中、中島さんが「フランクルが唯一回フロイトと直接話したのがこの辺りです」と解説してくださいました(「見てきたようなことを言いますが、赤坂訳本に書いてあったことです」…とはご本人の弁です)。1925年冬と言われるその邂逅のシーンを想像しながら、私たちもベルグ通り (Bergstr.) を歩きました。フロイトが住み、現在博物館となっているその重々しい建物には「精神分析の創始者、S.Freudが1891から1932までここに住み仕事をしていました」という大きな銘版が掛けられていました。中には、フロイトの書籍、写真、使用していた文具類など

も展示してあり、直筆の手紙を目近にみたときには、あの巨大なフロイトがぐっと身近に感じられました。カウチの部屋というのもあって、もちろん現代のモダンでシンプルなカウチでしたが、ちょっと座ってみると、フロイト先生に相談するクライアントになったような不思議な気持ちになりました。

(Y.N. & M.M.記)